

日本の山地・高原は、古代から現代に至るまで、その住民生活にさまざまな形で強い作用を与えてきた。しかもその作用は多面的であつて、地形・地質・植生などの自然的分野の要素から交通・交易生産などの経済活動、さらに余暇利用や宗教にわたる広汎な文化生活面にも、それぞれの時代についてさまざまな形で変化しつつかかわつてきた。そのような時間的要因の広汎な作用の多面性こそ、歴史地理学の研究者たちが魅力を感じる、またもつとも得意とする分野といえるのではなからうか。そして、いわゆる歴史地理学徒のみでなく、一般の地理学分野のそれぞれの研究者にとつても、立入りやすいテーマとして「山地・高原」は取扱いやすいものではなからうか。

ただ、今回のテーマに沿う研究が、古代から近世にわたつて発表されながらも、研究者の年齢分布からみて、一二篇中六篇までが五〇歳以上のやや老年層に傾き、三〇歳前後の若手研究者が僅かに二名という状況なのは、学界にとって重要な研究者、関心ある方々に対する「後継者養成」という重要な課題の必要性を重視しなくてはならないことを求めているものと考えられる。

右のように考えると、若手の研究者がこの分野に進出すること、或いは他分野における研究者が、現在研究にも必要な過去から継続している人文又は自然要素にまで溯つて考察することなど

に、大きな障害となつてゐるものは何かを考えなくてはなるまい。筑波大学に設けられた歴史地理専攻学生らを指導して来た体験からすると、近世以前の文字資料の解読の困難、考古学ことに歴史考古学の知識不足などのほかに、一般的な歴史知識不足がある。その理由は、太平洋戦後の新制大学の多くが歴史学課程と地理学課程との講義カリキュラムを完全に分離してしまつた点である。これは教養過程での一般的な歴史学・地理学の履修などでは到底埋めつくせる溝ではない。このような後継者養成問題についての討議検討こそ、学界の任務として重視する必要がある。

右の指摘にかかわる問題として提案したいのは、地理学者の側からの歴史地理学研究に対して、歴史学者の側からわれわれに要望する点をくみあげて、そちらが必要とする研究方法がどのような方式であるかを考えることである。そのためには歴史家をまじえてのシンポジウム・発表会などを催すことが必要であらう。そして歴史出身の若手研究者をも養成することが一案ではなからうか。学際的研究の要請という見地からも、考慮してよい方法かと考える。

末尾ながら、本書の上梓に際しては財団法人畠山文化財団から多額の助成金を賜つたことを付記し、ここに謝意を表する。

一九八二年一月

千葉 徳 爾